日本人の倫理と日本産業

長谷川　博*

Japanese Ethics and Japanese Industry

HASEGAWA Hiroshi*

The Japanese have been diligent for a long time, so Japanese industry has been developed. The main reason for this due to the sense of the Japanese.

There are several sources of Japan's hidden power. The Japanese respect engineers and a craftsmen, have homage to intangible assets, and hands technology down from generation to generation.

キーワード：生業と職人，老舗，暗黙知，感性と精神性，和と共生

1．はじめに

近代の日本は，海外の先進的な技術や知識を採り入れることによって発展してきたと言われてきたが，キャッチアップ前提のビジネス・モデルや社会制度はすでに限界を露呈し，先例のないトップランナーとしてのあり方を構築すべき局面を迎えている。世界では日本の文化や精神，ビジネスなどがかなり高い評価を受けている。特に若年層や子供を中心として日本の製品，作品，文化，流行などの日本ファンが多くなっているが，これまでの経緯や思い込みから，日本人自身，気がついていない場合も多い。そのことを自覚することによって，あらゆるビジネスのあり方が変わってくるし，その方が世界のためでもある。

2．日本人の勤労観

2．1　日本人の労働時間

日本人とフランス人の所得はほぼ同じであるが，年間の有給休暇取得日数はフランス人が平均 32 日，日本人は 8 日，旅行はフランス人の 20 泊 21 日に対して日本は 1 泊 2 日である。

日本は，1956 年頃から 1990 年頃までのおよそ 30 年以上に亘って，高度経済成長を実現した。それは，ヨーロッパ並の質の高い生活を目指してのことであったが，日本は OECD 諸国に比べて働き過ぎであるとの指摘が国内外からあり，段階的に労働時間短縮（以下時短とする）政策を採ってきた。

時短政策とは，1988 年の改正労働基準法の施行を受け，2000 年にかけて法定労働時間を週あたり 48 時間から 40 時間へと段階的に引き下げ，年間では英米の水準を下回る 1,800 時間程度まで下げるとした政策を指す。それに伴い，1990 年代を通じて週休 2 日制が広く普及した。

時短導入前の 1986 年と導入 20 年後にあたる 2006 年とで比較すると，週あたり平均労働時間は，統計的に有意に異ならない。週休 2 日制の普及により，土曜日の平均労働時間は低下し，平日 1 日あたりの労働時間は，過去 20 年間で趨勢的に上昇していることも分かった。つまり，週当たり平均労働時間が統計的にみて不変と観察された背景には，週末の労働は平日にシフトし，結果として平日と土日で労働時間が相殺されている可能性があると考えられる。また，平日の労働時間が延びたことにより，日本人は睡眠時間を削減していることもわかった。過去 30 年間では男性で 4 時間，女性で 3 時間程度，週当たりの睡眠時間が低下してきている[1] のである。

このことは，政策当局が労働時間削減を目的として，休日の増加や法定労働時間の引き下げといった対策を講じても，日本人は総労働時間を変えず，1 週間単

* 国際ビジネス学科
e-mail: hasegawa@nc-toyama.ac.jp

　（平成27年 2 月 2 日受付）

位の生活時間配分を変えることによって対応しており，休日の増加に伴う余暇や家庭サービスの時間は睡眠時間を削って確保していることを示唆している。

2．2 勤労と身分

日本人にとって，勤労は生きるための糧を得るためという目的を超えて，仕事を通じて自己の成長や満足を目指すなど自己実現の手段として捉えられている面もある。1つのねじを，魂を込めて作ることが，自分の精神を磨くことだと考えるのである。

日本人は，上から下まで，自分が働き，手を動かすことを厭わないが，海外の貴族は手を動かしたり，自らの身体を使って作業をすることは卑しい者のやることという感覚を持っている。

李氏朝鮮の貴族階級である両班は，日常，なるべく手足を動かさない生活を心がけ，外出の際にも下層階級の人が担ぐ「猫車」と呼ばれる乗り物に乗って移動していた。

キリスト教の価値観では労働は原罪に対する罰である。人間が労働しなければ生きていけなくなったのは，アダムとイブが禁断の木の実を食べてエデンの園を追放されてからのことで，生きていく糧を得るために自ら労働しなければならなくなったという感覚である。だから，貴族は働かないし，帝国主義では植民地を搾取した。現在は，欧米人の多くが，オンタイムとオフタイムを上手に切り分け，余暇の充実に力を注ごうとする。

それに対して日本では，天皇陛下が自ら皇居内の水田で田植えや稲刈りなどを行うことも恒例となっている。2015 年 1 月 14 日に皇居・宮殿「松の間」で行われた新年恒例の宮中行事「歌会始の儀」での天皇陛下の御製は，秋の夕闇が迫る中，皇居内の水田で恒例の稲刈りをしているときの情景を詠まれたものだった。

日本人には，古来より自ら手を動かして働き，糧を得ることは，身分などには関係なく当たり前に行うことが根付いているのである。

2．3 社会的労働観

江戸時代の思想家鈴木正三は，「農民は農業に，職人は工業に，商人は商業に刻苦勉励すれば，人々は成仏し，社会は発展し，その結果として人々は豊かになる[2]」と言った。ここに，マックス・ヴェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』において，労働を，原罪に対する単なる罰ではなく，「ベルーフ（Beruf・天職）」と捉え，自己目的として精励することが宗教目的にも適い，資本主義の要求にも合致するとした社会的労働観との，洋の東西を超えた符合も見られる。「日本人の倫理と資本主義の精神」もまた，世界の人々と共有することができれば，世界中に幸福をもたらすことにつながるのではないだろうか。

日本では，数ある生業の中でも，とりわけ農業など自然からの恵みを得る仕事，そしてそれを加工してものを生産する仕事を価値が高いとしてきた。

士農工商は身分制度であると学校で教わったが，身分制度と言えば，インドのカースト制度のようなイメージで，強い差別意識によって，社会や生活の中で，あらゆる差別を伴うもののように捉えがちであるが，士農工商とは，そうではなく，社会が重視し，人々が敬意を示す順だったのではないだろうか。

武士は，いざとなれば率先して命を投げ打って国を守るという，その身分に相応しい崇高な精神（ノブリス・オブリジェ）と，そのために自分を律し鍛錬を欠かさない日々に対して敬意を払う。しかし，江戸時代の武士は人口のわずか1％程度なので，それは別格として，それ以外の大多数はそれぞれ農工商といった生業を持っていたから，その産業を農工商としたが，それには日本人的な価値観が表れているのではないかと考えるのである。

すなわち，大地や自然界から糧を得る農業（林業や漁業などもここに含まれる）を，あらゆる生業の中で，最も崇高なものとして敬意を表す。その次に，自然界から得られた材料に対して自らの手で加工を加え，技を磨き，ものを生み出す職人がきて，商業は，自ら生産するわけではなく，動かしたり結びつけたりするだけだから一番下である。商業の中でも，金だけを動かし，利ざやを稼ぐ金貸しなどは特に賤しいこととされた。そこには，自然を畏れ敬い，共生していくことが人間のあり方で，それに近い順に尊いという価値観である。

また，農業が一番上に来るのは，前節でも述べた通

り，天皇陛下が農業を司り五穀豊穣を祈る司祭というお役目であるということからもつながる。

石門心学を開いた石田梅岩は，社会的にはこのように低く見なされていた商家を正当に位置づけることに努めた。すなわち商人の道も士農工の道と同じであるとして，商人には自らの道の励行を求め，社会に対しては商人への非難に反論して，利潤は正当であると擁護した。商人はひたすら消費者に対しては奉仕するよう心がけ，内にあっては合理性を追求し，倹約に努めるよう商人倫理を説いた[3] のである。

今日，日本産業は，ものづくりだけでなく，サービス業にいたるまで，あらゆる産業がその品質を評価されているが，その根源はこの頃すでに始まっていたともいえる。

2．4　瑞穂の国

日本では，人々がかなり古い時代から，海に囲まれた島国で，被侵略もなく，メンバーの入れ替えがほとんどない状態で暮らしてきた。このようなことは，日本人としては当たり前と思っているが，諸外国にはほとんど例がない。あっても日本ほどは長くない。幾世代にも亘ってそのような環境で暮らしを育んできたことにより，日本人は，それに適応するように進化してきた。人々が，いかにすればお互いに幸福に生活できるかという知恵を自然と身につけてきたのである。

安倍晋三は 2013 年に『新しい国へ　美しい国へ　完全版』の中で以下のように述べている。

日本という国は古来，朝早く起きて，汗を流して田畑を耕し，水を分かち合いながら、秋になれば天皇家を中心に五穀豊穣を祈ってきた，「瑞穂の国」であります。自立自助を基本とし，不幸にして誰かが病に倒れれば，村の人たちみんなでこれを助ける。これが日本古来の社会保障であり，日本人のDNAに組み込まれているものです。

私は瑞穂の国には，瑞穂の国にふさわしい資本主義があるのだろうと思っています。自由な競争と開かれた経済を重視しつつ，しかし，ウォール街から世間を席巻した，強欲を原動力とするような資本主義ではなく，道義を重んじ，真の豊かさを知る，瑞穂の国には，瑞穂の国にふさわしい市場主義の形があります。

（中略）市場主義の中で，伝統，文化，地域が重んじられる，瑞穂の国にふさわしい経済の有り方を考えていきたいと思います。[4]

諸外国と日本を比べて，その特異性から「日本の常識は世界の非常識」と言われることがあるが，そのことを「日本は遅れている」と捉えて，無批判に海外に合わせ，グローバル・スタンダードの名の下に，その本質を精査することなく採り入れたことによって，日本人が不幸になった例が近年多く見られた。その例は次節にて述べるが，日本人自身がそのことを自覚することが必要である。

2．5　職人の尊重

日本人は「職人」に敬意を払う傾向がある。長年一つのことに傾注し努力を積み，技をきわめたものは「たくみ」，「巨匠」，「名人」などと呼び，尊敬する。欧米においてもドイツのように職人の親方を「マイスター」と呼び敬意を払う文化の例が見られるが，少数である。

「職人気質」という言い方があるが，その言葉に込められるニュアンスは，1つのことを極めるために備わった頑固さや，愛すべき偏屈さを含み込んだうえでの賛辞である。

また，日本では，自分たちの業種を「○○屋」ということがあるが，こうした表現には，へりくだりながらも，職人としての矜持が込められていることが伺える。自分で言うから良いのである。

権力者は，多くの優秀な職人を重用し庇護してきた。具足師と呼ばれる甲冑などの職人は，8世紀頃には続日本紀など文献に記述があり，中世には武具制作の様子が描かれた絵が残されている。

絵に描くということは大変なことである。特に写真がない古い時代にはなおさらである。教会が支配していた中世ヨーロッパでは，人物画は御法度で，もっぱら静物や風景，人物は聖書に出てくる題材しか描くことが許されなかった。だから，王侯貴族は大金を払って城や屋敷に絵師を呼び，場合によっては生活の面倒を見たりして，自分や夫人の肖像画を描かせた。

日本は昔から自由だったから，その頃でも，広く美

人画や歌舞伎役者などが描かれていたが，いずれの場合でも，美しいものや，人々の関心があって喜ぶものを描いていた。中世に具足師の武具制作の様子が描かれていたというのは，人々の敬意，少なくとも関心があったことの表れであるといえる。しかもそれが，現在まで残っていることが日本人の文化に対する意識の高さである。

運慶，快慶といった仏師や，多くの寺社建築の職人が，時の領主など権力者に重用され，今に残る多くの仏像や歴史的建造物につながっている。新たに城下町を形成する際には，信頼する職人集団を領地へ呼び寄せて，家臣と同様に，築城した城の周囲に住まわせた。現在でも，鍛冶町や鉄砲町といった地名が各地に多く残っているのは，その名残である。

明治以降においても，農業・工業・商業など分野を問わず第一線で業務に精励している者で，他の模範となるような技術や事績を有する者を対象とする黄綬褒章が設けられた。

表1に平成 26 年秋の褒賞受賞者における黄綬褒章受章者 85 名のうちの一部の功績概要（職業）と現住所を示した。そこに見られるように，日本各地で地道に自らの職務に精励してきた機械工，塗装工，自動車整備工，左官，料理人，など様々な分野の職人，技術者が顕彰されており，毎年数百人が受賞している。2003 年（平成 15 年）の栄典制度改正で受章者数の増加を図られ，近年は他の年度においてもほぼ同様に多くの職人が受賞している。

元来日本人は，天才よりも，長年努力を積んできて名を遂げた職人を好む傾向があった。そつなくこなして成功する人には憧憬の感情は持つが，天賦の才というものを持つ人はごくわずかであることを知っていて，自らを重ね目標とするのは，はじめはなかなか評価されずとも，長年の努力を地道に積み重ねて成功した人である。そのような人に賛辞が送られる。

表1　平成 26 年秋黄綬褒章受章者

功績概要(職業)	現住所
機械修理工	福岡県
造管工	千葉県
金属工作機械工	山梨県
西洋料理人	千葉県
障害者支援員	群馬県
ソムリエ	神奈川県
マッサージ師	京都府
特別養護老人ホーム支援員	山口県
金属熱処理工	和歌山県
フラワー装飾師	京都府
開業助産師	大分県
日本料理人	東京都
造園工	神奈川県
木工塗装工	神奈川県
日本料理人	埼玉県
宮大工	広島県
製缶工	茨城県
金属加工機械組立工	愛知県
捺染工	石川県
造園工	京都府
自動車整備工	愛知県
金属特殊加工機工	東京都
特別養護老人ホーム看護師	茨城県
紙手漉工	愛媛県
日本料理人	福岡県
バーテンダー	東京都
木製家具製造工	北海道
ホームヘルパー	青森県
マッサージ師	神奈川県
アーク溶接工	宮城県
日本料理人	熊本県
染物職	大阪府
自動車板金工	広島県
板金工	愛知県

出典：厚生労働省「褒賞受賞者名簿」，厚生労働省ホームページ＞報道・広報＞報道発表資料＞2014 年 11 月＞平成 26 年秋の褒賞受賞者について

http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/ より受賞者 85 名の五十音順名簿の上から 40%を抜粋し作成

3．知識・技術の伝承

3．1　土地と人の関わり

外国の土地は数百年さかのぼればまったく違う人達が住んでいたから人間がつながっていない。アメリカは先住のネイティブ・アメリカンを追い払って建国して 240 年，中華人民共和国は 60 年程度の歴史であり，現在そこに住んでいる民族とは全く異なる人々がその土地に住んでいた。それに対して日本人ははるか古代に日本列島に住み着き，ほとんどメンバーが固定されたまま，代々2千年以上も暮らしてきた。古い時代には，南方系，北方系，渡来系など，様々なルーツを持つ人々も混在していたが，世代を重ねるうちに，日本人としての，民族性，文化を育み，今日まで感覚を共

有してきている。その長さが諸外国とは1ケタも2ケタも違うのである。

同じ土地に長く暮らしていることで，自然や環境に対する考え方も自ずと違ってくる。日本は四季があり，さまざまな海産物や，きのこ，竹の子，山菜といった自然の恵みを享受してきた。それらを採取する際にも，自然に感謝して，必要以上に採りすぎたりしない。そうすることで，次の年も自然は恵みを与えてくれることを知っていた。今の自分だけ得をすれば良いのだとばかりに，自然の資源も根こそぎ採り尽くしてあとは知ったことではないという感覚では決してないのである。海外では，禿げ山が多く目立つ土地があるが，自分勝手で無計画な採取や開発のなれの果てであろう。

3．2　継続企業

そのようなことは企業経営にも表れる。アメリカ型の企業経営は，株主利益を追求する。株主利益とは，配当金であり，株価である。したがって経営者は，単年度利益主義を押し進め，キャピタルゲインのため，株価上昇のため短期的利益の獲得に邁進する。今現在がすべてであり，数年先のことや次の世代のこと，ましてや何百年も先のことなど眼中にないのである。

アメリカは世界経済の新参者で，オランダとイギリスから多額の投融資を受けていたが，移民の国だから信用されておらず，監査制度，取引所制度，所有と経営の分離その他ありとあらゆることを要求された。それをアメリカは，グローバル・スタンダードと言って債権国である日本に求めたが，日本のように長期に亘り相互に信用し合うことができる国では無用なことである。

株式は取引先や従業員で持ち合い，キャピタルゲインなど考えていないので，株価の上下に一喜一憂したりしない。日本企業は，長らく M&A とは無縁で，譲渡や倒産を前提としていないので，資産評価も取得原価主義で十分である。含み益や含み資産も見込んで総合的に会社を信頼していた。時価会計は，企業を買収したい人にとっては有用な情報だが，そもそも売却しなければ意味をなさず，むしろ時価評価をすることによって未実現の利益に対して資金の社外流出が起こるなどの不都合の方が多い。アメリカは，国際的な要求と言って日本企業に時価会計を促し，アカウンタビリティ，ディスクロージャー，可視化を次々に求めたが，それらはコミュニケーションのほとんどを言語に頼る人々が，日本を安く買い叩こうとして言い出したことである。ムーディーズ，S＆P，フィッチといった格付け会社が，評価を何段階下げたといっては日本で大きく報道されるが，デフォルトや倒産などの最悪のリスクを避けるためには重要な情報であっても，欧米に拠点を置いた彼らの感覚のみでは，目に見えない資産や暗黙知の評価はできない。

老舗の中には，買収リスクを避けるため，非上場を貫き，長期に亘って事業を継続してきた企業も多い。日本で証券取引所とその制度ができたのは明治時代であった。最も古いのは，現在の㈱東京証券取引所の前身で，渋沢栄一，大隈重信らによって 1878 年に創立された「東京株式取引所」である。

信用というものを，長く続くこと続いていることを最重要視して捉え，老舗企業の立場に立って見るならば，明治時代に創設され，たかだか 130 年程度の証券取引所やその根拠となる制度よりも，はるか以前から，数百年後の家業の繁栄を願い，代々事業を引き継いできた創業者以来の先代達を敬い，その方針を信頼し尊重することは当然の帰結であろう。

会計学の論理の仮定の一つに「継続企業の公準（going concern）」というものがあるが，これは一般に企業は永久に継続することを前提とするから，適正な期間損益計算を行うのだという理論の根拠となっているが，その前提となる部分を本来の意味で実現してきたのは日本企業であると言える。

日本の企業経営は，古くから長期的視点で行われてきた。そのことは，老舗といわれる業歴の長い企業の多さ，個々の企業での伝統の長さがそれを物語っている。それは，世代を超えた信用の継続を目指してきた結果であり，信用は無形の資産であるということをみんながわかっているのである。

3．3　老舗は日本に集中

日本には業歴 100 年以上の企業が，帝国データバンクによると少なくとも20,000社以上（小規模零細企業

や個人商店は含まず）あり，研究者レベルでは 10 万社を超えるとも言われている。300 年以上の企業も 400 を超える。

さらに世界最長寿の企業は日本にある。

世界最古の企業とされるのは，大阪の四天王寺に長く関わってきた金剛組[5]，578 年創業，実に業歴 1400 年を優に超える，飛鳥時代から宮大工を手がけてきた建設会社である。

ギネスブックには登録されていないが，間違いなく「現存する世界最古の会社」にして「世界最長寿の企業」とみられている。[6] ギネスブックに登録されていないのは，エントリーが当事者の自主申告によってなされているという理由であろう。

表2 業歴800年以上の主な老舗

企業名	所在地	創業年
	沿　革	
金剛組	大阪市天王寺区	578年
聖徳太子に百済から招かれた宮大工が四天王寺を建立して依頼，寺院建築に携わる。		
西山温泉慶雲館	山梨県早川町	705年
武田信玄や徳川家康の隠し湯といわれる。		
古まん	兵庫県豊岡市	717年
城崎温泉旅館「千年の湯　古まん」を経営		
善吾楼	石川県小松市	718年
粟津温泉で温泉旅館「法師」を経営		
源田紙業	京都市上京区	771年
水引の製造，現在は祝儀用品，紙製品		
田中伊雅佛具店	京都市下京区	889年
真言宗の寺院向けに，仏像など仏具の製造販売		
須藤本家	茨城県笠間市	1141年
現在では日本で最も古い酒蔵で，「郷の誉」ブランドなどを醸造している。		
通圓	京都府宇治市	1160年
日本茶の製造販売を行う。初代は現在も本店がある宇治橋のたもとで茶を供したといわれる。		
ホテル佐勘	仙台市太白区	1184年
仙台市・秋保温泉で「ホテル佐勘」を経営。伊達家の湯浴み御殿として栄える。		
伊藤鉄工	山形県鶴岡市	1189年
鋳物師として創業。現在は，空調機器用の特殊バルブなどを製造している。		
御所坊	神戸市北区	1191年
神戸市・有馬温泉で「陶泉　御所坊」を経営。有馬を代表する旅館の一つ。		
白鷺湯たわらや	石川県加賀市	1190～99年
平安～鎌倉時代に再興された石川県・山中温泉で「白鷺湯　たわらや」を経営。		

出典：帝国データバンク史料館・産業調査部編『百年続く企業の条件』，朝日新聞出版，2009，p53 から作成

金剛組以外にも業歴 1000 年を超える企業はいくつも存在している。慶雲館，古まん，法師は，共に温泉旅館で，開湯・創業の時期について諸説あり，順位は不詳ではあるものの，この3社が世界のトップ3であることには変わりない。

表 2 は業歴 800 年以上の老舗を示しているが，そのうち 6 社までは業歴 1000 年以上である。開業当初に思いをはせると気の遠くなりそうな店や会社が並ぶ。

3．4 無形のものの重要性

業歴の長さはもちろんであるが，これらの老舗企業には，あらゆる業種が含まれていることにも着目したい。老舗は，ものづくり企業にとどまらず，サービス業にもおよんでおり，温泉旅館が多くあることなどは，今日の健康意識や長寿へとつながるものでもあり，医療や宗教などといった，人間の根源的な生きることへの欲求に近いところにあるものと考えられる。以前から日本製品への評価は国際的に高かったが，それに加え近年では，平均寿命の長い日本人の生活スタイルや，きめ細かいサービス，日本食などが世界的に認知されてきている背景の一つであるともいえる。

さらに，ヨーロッパ最古の大学とされているボローニャ大学（1088 年創設）よりも古くからの大学が日本にある。828 年に空海が開いた綜芸種智院である。現在でも種智院大学として存続しているが，京都の名門，洛南高校の経営母体でもある。

日本では古くから金や銀が採れたが，日本人はその金を使って中国へ留学生を出して，書物，学問，文化，芸術その他を買った。ヨーロッパでは，玉座や王冠を立派なものにすることに金を使っていたから，「日本はなぜ学問，思想，宗教を買いに来るのか」とびっくりした。[7] 日本人は平安時代から学問や知識を消費財にしていたのである。

およそ 1200 年も前に大学ができたということからも言えるが，日本には多くの知が集まっており，世界中の知識は日本語に翻訳されていて，多くの知見は日本語で見ることができるという世界でも稀な環境と言われる。

第 2 次大戦後，GHQ は占領統治に不都合とされた

7769 点もの出版物等を禁書に指定し没収を行った。古代に秦の始皇帝が行った焚書にも喩えられる野蛮な行為だが，出版社や書店から没収はしても，日本では本は庶民の手元にたくさんあった。

日本人は，目に見える物質的なものだけでなく，技術や知識といった目に見えないものに対する重要性に，古くから庶民レベルで気づいていたのである。

3．5 日本以外の状況

（1） ヨーロッパ（エノキアン協会）

日本以外での老舗はどのような状況であろうか。

ヨーロッパには，200 年以上の企業が加入できる「エノキアン協会」（旧約聖書の 365 年生きたと言われるエノクに由来）という組織がある。この中でヨーロッパ最古が 1369 年設立のエトリーニ・フィレンツェ社というイタリアの金細工メーカー，これより古い会社が日本には 100 社近くある。表 2 の善吾楼はエノキアン協会加盟で，世界最古の温泉旅館としてギネスブックに登録されている。エノキアン協会はパリに本部を置き，ヨーロッパを中心に 40 社が加盟しており，その中でも一番歴史が古いとされる。日本からは善吾楼を含めて，虎屋，月桂冠，赤福といった老舗が 5 社加盟している。加盟条件は，創業 200 年以上の他，現在も創業者一族による経営がなさていること，創業者一族が会社を所有，または筆頭株主であること，財務状態が良好であること，など[8] である。

（2） アジア

日本以外のアジアでは 100 年以上の歴史ある店や会社を探すのが相当に難しい。韓国では「3 代続く店はない」と言われ，100 年以上の店舗や企業は1つもない。台湾では，台湾出自で創業 101 年の彰化商業銀行が稀な例である。中国では，漢方薬，中国茶，書道用具，陶磁器店，料理店，ホテルなどの業種で 100 年以上の老舗が何軒もある。最長は 1669 年創業の世界最大の漢方薬メーカー「北京同仁堂」（六味地黄丸で有名）である。中国では株式会社という民間組織形態が認められてこなかったので厳密には 100 年以上の会社はない。例外的に，香港にはイギリス系の古い企業がいくつもある。フィリピンでも 100 以上の老舗はスペイン系かアメリカ系である。1834 年設立のアヤラ商会（不動産王，スペイン系）。マレーシア，シンガポールはイギリス系の老舗が多い。

かつての仏印（ベトナム，カンボジア，ラオス）は社会主義と度重なる戦乱でフランス系の老舗もなく，旧オランダ領のインドネシアも，スカルノ大統領時代にオランダ資本の接収と国有化を推し進め，宗主国に連なる老舗は皆無に近い。欧米による植民地化を免れたタイは，地元資本で老舗と呼べるのは，開業 100 年を迎えた宝石販売の「プレミア・ジェムズ・トレーディング社」など数社のみで，伝統工芸の金細工工房もごくわずかである。

インドのカーストは家業の継承という点では都合がいいはずだが，地縁血縁で細々と続くので，個人商店はあるが，老舗企業と呼べるのはごくわずかである。イギリス植民地下の 19 世紀末に民族資本初の紡績工場を作り，その後インド初の製鉄会社を主軸として大財閥となった「タタ・グループ」が成功例としてある。

2000 年に出版された『ASIA’S NEW WEALTH CLUB』に，アジアの億万長者ベスト 100 うち半数以上を占めるのがチャイニーズの企業であるが，その中で 100 年以上続いている企業は 1 社もなく，起業者一代か親子二代で築いた成り上がりである。[9]

3．6 変わらないものと技術革新

宮大工の技術は，ずっと昔に確立されほぼ完成されたといわれている。必要なのは知識と技術の伝承で，人間の世代交代を超え，数百年の単位で仕事を捉えている。木造の建築を何百年以上も維持し続けるための適切な材料となる木材の確保，そのための山林の管理といった知識や技術は，式年遷宮をはじめとした神殿などの定期的な修復は，伝統として数百年以上に亘って受け継がれているし，一介の職人である無名の宮大工も，数百年後に訪れることになる建物の改修に思いを馳せ，解体した時に「良い仕事をしているな」と感心されることを想像し，矜持を込めて天井裏の梁に自分の名前を記す。

長い歴史を持つ老舗であっても，主力事業の内容

や販売方法などは，時代の変化に合わせて変わっていくことが多いが，老舗だからこそ，伝統を長年引き継いでいることそれ自体が，新しい製品で使用される技術に対応し，伝統に裏打ちされた確かな技で世界に貢献している例がいくつも見られる。

京都市山科区にある 1700 年創業の福田金属箔粉工業は，金屏風や仏壇，仏具に使用される金銀箔粉を家内工業的に製造していたが，明治維新による遷都と廃仏毀釈で危機を迎えたが，機械化によって生産量を増やし，自動車，携帯電話，パソコンなどあらゆる機器に使われる金属箔や金属粉を製造し，長寿企業ながらもIT分野など最先端の技術と密接な関係にある。携帯電話などの電磁波シールド用塗料として使われる「導電塗料用銅粉」は 2005 年「第 1 回ものづくり日本大賞内閣総理大臣賞」を受賞した。[10]

同社の技術は携帯電話の折り曲げ部にも配線基盤の小型化を進める部品が使われており，世界シェア 90％とされている。

携帯電話の部品では，バイブレーションに使われる部品も日本の老舗がそのほとんどを供給している。振動のための部品は 4 ミリくらいのモーターで，そこで使われている極小のブラシを生産しているのが，東京日本橋の田中貴金属工業である。1885 年創業時は金地金などを扱う両替商であった。[11]

3．7　お上に対する信頼

グローバリズムは基本的に国家や政府といったお上を信頼していない。歴史的な経緯もあるが，ユダヤ人は国家を持たず，金融で身を立てるしかなかったし，同じアジアでも支那人は世界中で成功しているが，国家，政府を全く信頼しておらず，金と血縁だけを信頼の根拠としている。金を稼ぐことに重きをおき，財産ができれば，リスクヘッジのためにさらなる蓄財と子女の海外移住などに励むことになる。日本人の感覚とは大きく異なっている。

日本では，領主などの権力者が職人を信頼し重用してきたのと同様に，民衆の側も，古くから，お上に対する信頼感を持っていた。

領主や将軍，皇室などへの献上品や今日でも宮内庁御用達などと冠した商品を見かけることがある。また，「お墨付き」という言葉が今日でも現実味を帯びていることや，「お上のやっていることだから間違いない」という台詞が落語によく出てくることも，為政者や権力者といったお上に対する信頼が厚いことの現れである。このことからも権力者と民衆，領主と領民といった対立軸から闘争を通じて民主主義を打ち立ててきた西欧社会とは全く異なっているのである。

従業員も会社を信頼している。組織のために励むことが，長い目で見ればいずれ自分の幸福につながると思っている。資本家と労働者といった対立ではなく，そこから終身雇用や年功序列などの特徴的な日本的雇用慣習が生まれ，職人などの労働者が，安心してものづくりに取り組む環境を築き，伝統を育んできた。

前述の老舗，福田金属箔粉工業では，親子 2 代，3 代にもわたって努める社員が数多くいる。祖父や父親の代から働く「歴代社員」は，600 人の従業員のうち，100 人ほどを占めるという。[12] 会社が社員を大切にしていること，社員は会社を信頼していることの現れである。会社から大事にされていなかったら，自分の子供を就職させたいとは思わないし，家で会社の悪口を聞かされていたら，父親と同じ会社に入りたいとは思わない。日本は長い時間，人間がつながっている長期信用継続社会である。自分が納得する良い仕事をしてこそ，信頼が得られ，それが世代を超えて信用の継続につながることを知っている。

4．ものづくりにみる精神性

4．1　感性と美意識

日本では，人知れず行った努力の積み重ねがいずれ評価されるという感覚がある。

共同体社会である日本では古くから「陰徳あれば必ず陽報あり」とことわざにも言われるように，人知れず善行，功徳，努力を積んでいれば，いずれ報われるものだという感覚が根付いている。

ものづくりにおいても，作る人，それを利用する人，双方がそのことをわかっている。だから，作り手は細部や見えないところにもこだわり，誰から見られることがなくとも，自分が納得するまでとことん良い仕事をしようと

する。宮大工のように，自分がこの世を去ったずっと後の何百年後かに感心されることを思い描いている。

トヨタがレクサスをつくったとき，音を少なくせよと命じられた。静かな自動車をつくれ。そこで，全員一致協力して静かにするために頑張った。やっていることは無茶苦茶だとも言える。たとえば静かなエンジンは，回っている部分が真ん丸でないといけない。自動車 1 台にはベアリングが 100～150 個ついているが，少しでも中心がズレていたら音が出る。一番大きい仕事はクランクピンのセンタリングだが，真ん丸のものを真ん丸のところへはめて回せばブーンとも言わない。

これまでのエンジンでもそれはもちろんやっている。実際走るには何も問題はない。100 年も前からそうなっている。しかし，それをもう 1 桁厳しくやろう。それが進歩かどうかはさておき，1000 分の 1 ミリ単位でゆがみをなくしてやれ。外国のものは 1000 分の 5 だとすれば，トヨタのものは 1000 分の 1 にしよう，と努力してきた。

静かさという感性の満足のために数百億円か数千億円を使ってしまうとは，なんとも凄い日本経済である。芭蕉の句に「閑かさや　岩にしみ入る　蝉の声」という何とも非科学的な句があるが，日本人は全員がそれを知っている。[13]

静かさの目標は，時速 280 キロで走行中に隣の人とひそひそ話ができるというものだったと聞くが，テストコースもなく，北海道士別に直線 3000m の土地を買って試験場をつくった。しかし，ドイツならアウトバーンもあるが，日本ではそんなスピードを出す場所もない。

何百年も先の人に感心されることを目指す，実用的でないスピードでの静粛性の追求，いずれも，経済合理性の観点からは無駄なことだ。しかし，これは感性という面では意味を持つのである。

ウクライナの小学校では5年生に，芭蕉の作品などを通じ，日本人は自然の描写によって己の心情を表現する，日本人は平凡さの中に美を見出し，精神性と物質世界との調和と大切にする（中略）と教え，さらに高校 2 年生では，川端康成の作品を題材に，茶道の特徴や登場人物の倫理観，美意識を中心に学習し，教師は日本文学における美しさの表現方法を説明し，日本人は規律正しく倫理意識の強い国民，対人関係に細心の注意を払う国民，文化や伝統を大切にする国民である[14]　と教育しているという。

今日，同じ製品なら日本製を欲しがる人は，世界的に増えてきている。外国製品の方が売れることがあるのは価格競争の結果である。日本製品を使ったことがあり，メイド・イン・ジャパンの良さを分かっている人は，日本の製品には魂が宿っているという。

職人はものづくりに魂を込めている。ものづくりは，作る本人が心を込めてやるというのが一番である。ものづくりのための道具にも感謝と敬意を表し，手入れしながらできるだけ長く丁寧に使い，使い倒した後も，ただ廃棄するのでなく，針塚や包丁塚などを設けて，ちゃんと供養をする。

4．2　目に見えないものへの敬意

日本人が無形のものの重要性に気づき，尊重してきたことは 3.4 でも述べた通りだが，数字で示されることだけ，目に見えることだけがすべてであると考えてしまうことは，判断を誤ることにつながる。ものづくりでも企業経営でも，そのすべてを説明できる訳ではない。暗黙知とかインタンジブルズと言われる部分が，伝統によって継承されている面が大きいのである。

伝統的な技術の中には，今日でも口伝や，一子相伝によってしか受け継がれないというものがある。仏門の修行では，説明するための，問のための問を「愚問」と呼び，意味のないものとしている。

ノンバーバル・コミュニケーションがわからない人は，あいまいだとかいい加減だと批判するが，すべてが言語化できるというのは不遜な態度である。普通の日本人は非言語で伝わる情報も多くあることを知っている。労働力の成果は，その総和だけでなく，それを超えるチーム力があることはよく知られている。特に日本人のメンバー同士だと，日本語と感性が共有できていることで，そのパフォーマンスを上げることがある。ある自動車メーカーがデザインを発注する際に，その車が使用されるシチュエーションのストーリーを示した業者と示さない業者の2つのグループを作ったところ，採用されたデザインはすべてがストーリーを示した方のグループからだったという。

4．3 和と共生（まとめにかえて）

日本は，外国のあらゆるものを採り入れ，しかもそのままではなく，自分たちの暮らしや伝統に合うように造り変えてきた。古くは，漢字や仏教，中世にはキリスト教や鉄砲，近代は，欧米の科学技術や社会制度，今日でも工業製品や料理などである。そのほとんどが，当初は日本に大きな影響を与え，国難にもつながる圧力と見られてきたものでもあり，自分たちの意思とは無関係にやむを得ず採り入れたものでもあった。さらに，日本人の手によって造り変えられると，多くは本家や元祖より良くなった。その例は，古くは思想，宗教，近年でも自動車，鉄道，外国料理，と枚挙に暇がない。

西洋的な，あるいは一神教の思想では，自然にせよ人間にせよ，異質なものは，排除し，拒否し，攻撃し，屈服させるべき対象である。聖なるものと邪悪なもの，陰と陽，自然と人間など，あらゆるものを2分法の対立軸で考える。人間である自分と違う神を信じているものは，人間ではないから殺してもいいと考える。

多神教で，和と共生という日本の感性は，異質なものに出会った時，全面的に拒絶するのでなく，まず受け入れてみて，お互いにとって良い道を探るのである。自分から見て全く異なるものでも，自分が善で相手が全面的に悪とは考えない。お互いを理解し，優れている点があれば，そこを受け入れ，共存していく道があるのではないかと考えてきた。そうすることで，伝統を守りながら新しい技術による近代化の両立ができたのである。このようなことから，日本人の感性は，物質的なことと精神的なことも，どちらか一方に偏るのではなく，両方とも大事にするということが言える。

弱肉強食のグローバル・スタンダードも，共同体の論理もわかるし，ウォール・ストリートの資本主義も，金銭で計ることのできない目に見えない価値が大事だということも，両方わかるのが日本人の良さである。今後，両方わかってそれを尊重し，調和することのできる感性は，国際社会においても重要になる。

成仏するためには仏道修行が必要だということはわかっていても，一般の人々は生活のために日々のほとんどを労働に費やさなければならないが，各々が労働に励むことが即仏行の修行となるとした鈴木正三の思想から「個」と「全体」の間に調和が成立するのである。

一人ひとりがそれぞれの生業で勤勉に努めていれば，それに共感する世界の人々は自然とついてくる。日本に憧れを持つ外国人は多い。時には日本人自身が，自らの営みは最も先進的な感性を持ってなされているのだという自信を持って，イニシアティブを持って語り，広めていくことが世界の人々の幸福にもつながるのである。

引用文献

1 黒田祥子「日本人の労働時間－時短政策導入前とその20年後の比較を中心に－」，RIETI Policy Discussion Paper Series 10-P-002,独立行政法人経済産業研究所，2010，pp.2～11
2 馬淵睦夫『いま本当に伝えたい感動的な「日本」の力』，総和社，2012，pp127～128
3 馬淵睦夫，同上書，p129
4 安倍晋三『新しい国へ　美しい国へ　完全版』，文芸春秋，2013，pp.245～246
5 帝国データバンク史料館・産業調査部編『百年続く企業の条件』，朝日新聞出版，2009，p52
6 野村進『千年，働いてきました－老舗企業大国ニッポン』，角川書店，2006，p20
7 日下公人『いよいよ、日本の時代がやってきた！』，ワック，2014，p119
8 帝国データバンク史料館・産業調査部編，前掲書，p55
9 野村進，前掲書，pp22～28
10 帝国データバンク史料館・産業調査部編，前掲書，p121
11 野村進，前掲書，pp39～41
12 日本経済新聞社編『200年企業』，日本経済新聞出版，2010，p37
13 日下公人『数年後に起きていること』，PHP研究所，2006，pp37～38
14 馬淵睦夫，前掲書，pp24～26

参考文献

朝日新聞編『日本の百年企業』，朝日新聞出版，2011
泉谷渉『100年企業、だけど最先端、しかも世界一』，亜紀書房，2007
唐津一『日本のものづくりは世界一』，PHP研究所，2006
日下公人『「道徳」という土なくして「経済」の花は咲かず』，祥伝社，2004
日下公人『「見えない資産」の大国・日本』，祥伝社，2010
日下公人『「新しい日本人」が創る2015年以後』，祥伝社，2014
黄文雄『日本人はなぜ世界から尊敬され続けるのか』，徳間書店，2011
藤原正彦『日本人の誇り』，文藝春秋，2011
マックス・ヴェーバー著・大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』，岩波書店，1989
渡部昇一『アメリカが畏怖した日本』，PHP研究所，2011
渡邉哲也『儲（もうけ）～国益にかなえば経済はもっとすごくなる！』，ビジネス社，2013